

『東京大学言語学論集』 32
2012年9月
pp. 11-21
東京大学
人文社会系研究科・文学部
言語学研究室

Tokyo University Linguistic Papers (TULIP) 32
September 2012
pp. 11-21
Department of Linguistics
Graduate School of Humanities and Sociology
Faculty of Letters
The University of Tokyo

サハ語（ヤクート語）の後置型連体修飾と数の一致

Postmodification and Number Agreement between Nouns and Postmodifiers in Sakha (Yakut)

訂正のお願い

『東京大学言語学論集』32号 pp.11-21 掲載の江畑冬生氏の論文に印刷の不具合が生じてしまいました。江畑氏をはじめ執筆者・読者の皆様に心よりお詫び申し上げます。

つきましては、本抜き刷りを本誌の所定箇所（当該論文の最初のページ）に貼付して頂けますようお願い致します。

『東京大学言語学論集』編集委員会

A request to our readers

Some of the characters in Mr. Ebata's paper were printed incorrectly when this issue of TULIP first went to press. We have reprinted this section separately; please insert it in place of pages 11 to 21 in the original. We apologize for the misprint.

Editorial Board, Tokyo University Linguistic Papers

江畑 冬生

EBATA, Fuyuki

サハ語（ヤクート語）の後置型連体修飾と数の一致

江畑 冬生

fuyuki@mtc.biglobe.ne.jp

キーワード： サハ語，名詞句，修飾語，語順，一致

要旨

サハ語はいわゆる「アルタイ型」の言語であり，修飾要素は被修飾要素に先行することを統語上の原則とする。本稿では，このようなサハ語の統語法に反し被修飾名詞に後続する連体修飾語について報告する。後置型連体修飾を行う語は6つあり，それらには話者による親近感を表すという意味的共通性がある。後置型連体修飾においては，修飾語は数において被修飾語と一致しなければならないという特異性を持つが，一方で格接辞については，通常の名詞句の場合と同じく句末にのみ付加される。

1. はじめに

河野 (1989) は統語的原理に焦点を合わせた類型的分類を試みており，1つのタイプとして「アルタイ型」言語を提唱している。アルタイ型言語の最大の特徴は，主要部が最も後方に現れ，それを修飾・限定する要素は常に主要部に先行する点である。河野 (1989) はこれを「連辞的統語原理」と呼んだ。本稿が考察の対象とするサハ語もアルタイ型言語の1つであり，やはり連辞的統語原理を原則とする¹。すなわち，修飾語は主要部に先行することを統語上の原則とする。ところがこの原則に反して，意味的には連体修飾を行うにもかかわらず統語的には被修飾名詞に後続するという特徴を有する語が少数ある。本稿ではこの現象を「後置型連体修飾」と呼ぶ。本論文では，後置型連体修飾における屈折接辞の付加の仕方を記述し，特に連体修飾語と被修飾名詞の間に「数の一致」が起こることを指摘する。まず第2節では，サハ語の連体修飾は典型的には被修飾名詞に先行する事実を確認した後，これとは語順において異なる後置型連体修飾のいくつかの例を示す。

2. 連体修飾と語順

2.1 被修飾名詞に先行する連体修飾

第1節でも述べたように，サハ語においては修飾語は被修飾語に先行することを原則とする。(1)および(2)は，連体修飾語が名詞に対して先行し，全体として大きな名詞句を形成する例であ

¹ サハ語は東シベリアで話されるチュルク系の言語である。2002年のロシア国勢調査によれば，サハ語の話者数は約45万人である。サハ語の音素は次の通り： /p, b, t, d, č[ʃ], ʒ[ʒ], k, g, s[s-h], x[x-q], ɣ, m, n, ŋ[n], ŋ, l, r, j; a, aa, e, ee, o, oo, ce, cece, u, uu, i, ii, u, uu, y, yy, wa, ie, uo, yce/. [s]と[h]とは同一音素に属すると考えられるが，本発表では音声的隔たりも考慮し区別して表記している。ロシア語からの借用語のうち固有語化されていない語は，ロシア語正書法からの転写により表記している。

る。この時、屈折接辞（複数接辞・所有接辞・格接辞）は名詞句中で最も後方に現れる要素、すなわち主要部である名詞にのみ付加され、連体修飾語には決して付加されない。

- (1) **kura** **kuhalga-burtu-n**
 小さい 心配-POSS.1PL-ACC

「私たちの小さな心配を」

- (2) **aat-taax** **ulaxan** **buustapka-lar-ga**
 名-PROP 大きい 博覧会-PL-DAT

「有名で大きな博覧会にて」

数量を表す修飾語にも同様の原則が成り立つ。すなわち、数量詞が名詞に先行して全体として大きな名詞句を形成する。屈折接辞は名詞にのみ付加され、数量詞には付加されない。

- (3) **ys** **suol-unan**
 3 方法-INST

「3つの方法で」

- (4) **elbex** **wal-lar-ga**
 多い 家族-PL-DAT

「多くの家族に」

連体修飾節もやはり同様である。連体修飾節は被修飾名詞に先行しなければならない。

- (5) **urukku-ttan** **bil-er** **žom-mu-ttan**
 昔-ABL 知る-VN.PRES 人々-POSS.1SG-ABL

「私が昔から知っている人々から」

このように、サハ語の連体修飾構造においては、第1節で述べた連辞的統語原理が広く見られる。屈折接辞について言えば、主要部であり最も後方に現れる名詞にのみ付加され、修飾要素に付加されることは無い。つまり、連体修飾語を含んだサハ語名詞句の構造は、(6)に示すように模式的に示すことが可能である。

- (6) 修飾語 名詞-PL-POSS-CASE

2.2 後置型連体修飾

サハ語に広く見られる連辞的統語原理に反し、被修飾名詞をその後方から修飾する、すなわち後置型連体修飾を行う一群の語がある。筆者はこれまでのところ、6つの語が後置型連体修飾を行うことを確認している。本節ではまず、そのうちのいくつかを例として、連体修飾語が被修飾名詞に後続することがあるのを示す。

- (7) *ije-m* *erejdeex* *telefonnuu-r-u-gar* *wtuuu-r*
 母-POSS.1SG 哀れな 電話する-VN.PRES-3SG-DAT 泣く:PRES-3SG

「哀れな母は、電話しながら泣いている」

- (8) *ze* *koer-dy-m* *tiik-ke* *suor* *oburgu*
 そして 見る-PAST-1SG カラ松-DAT カラス 立派な
 xonoj-on *olor-or-u-n*
 首を伸ばす-CV 座る-VN.PRES-3SG-ACC

「そして私は見た。カラ松に堂々としたカラスが首をしっかりと伸ばして座っているのを」

- (9) *kuuum-muut* *aah-an* *sajum* *baraxsan* *saturuulaa-ta*
 冬-POSS.1PL 過ぎる-CV 夏 愛する 歩く-PAST:3SG

「私たちの冬が過ぎ去り、愛する夏が歩みを始めた」

(7)から(9)の例において、*erejdeex*「哀れな」、*oburgu*「立派な」、*baraxsan*「愛する」はいずれも先行の名詞を修飾している。連辞的統語原理を基本とするサハ語にあって、これらの連体修飾語は被修飾名詞に後続する点で特異性を示している。連体修飾語と被修飾名詞の間には、副詞など他の自立語が介入することは無い。従って、これらの連体修飾語は先行の名詞とともに1つの大きな名詞句を成すと考えられる。後置型連体修飾は、すでに指摘した語順だけではなく、屈折接辞の付加の仕方についても特異性を示す。このことについて、第3節で詳しく考察する。

3. 後置型連体修飾の特徴

サハ語の後置型連体修飾について記述した先行研究は無い。本節でははじめに、後置型連体修飾を行う修飾語の意味的特徴を明らかにする。次に、後置型連体修飾において、屈折接辞の振り舞いが典型的名詞句の場合と異なることを指摘する。

3.1 修飾語の意味

筆者の調査では、サハ語において後置型連体修飾を行うのは次の6つであることが分かった：*erejdeex*「哀れな」、*muŋnaax*「哀れな」、*baraxsan*「愛する」、*sunuŋa*「愛する」、

asaj「愛する」、*oburgu*「立派な」。これら6つはすべて、被修飾名詞に対する話者の親近感を表すという特徴が共通している²。従って本稿では、これらをまとめて表愛修飾語と呼ぶ³。6つの表愛修飾語のうち、*suuwa*「愛する」と*asaj*「愛する」を除く4つは比較的高い頻度で用いられる。

3.2 複数接辞の付加

表愛修飾語を含む名詞句に複数接辞が付加される場合、複数接辞は名詞および表愛修飾語の両方に付加されなければならない。

- (10) *ojox-tor* *baraxsat-tar* *kurus* *guun-nui-lar*
妻-PL 愛する PL がっかり する-PAST-3PL
「愛する妻たちはがっかりした」

- (11) *bæraæ-læx* *erejdeex-ter* *boertelyoet-ten* *kuot-a* *sataa-n*
狼-PL 哀れな-PL ヘリコプター-ABL 逃げる-CV AUX-CV
「哀れな狼は、ヘリコプターから逃げようとして. . .」

常に複数扱いを受ける *zon*「人々」あるいは1・2人称の代名詞 *bihigi*「私たち」や *ehigi*「君たち」が被修飾語である場合、被修飾語には複数接辞が含まれていないにも関わらず、表愛修飾語には複数接辞が義務的に付加される。この点から分かるのは、表愛修飾語への複数接辞付加は、単に被修飾名詞に複数接辞が付加されている場合に限られているのではなく、被修飾名詞の複数性が関与していることである。言い換えれば、この現象は被修飾語と表愛修飾語の間の「数の一致」である。

- (12) *budrguu* *zon* *erejdeex-ter* *xan-tan* *oččo* *elbex*
昔 人々 哀れな-PL どこ-ABL それほど 多い
kemysten-en *xoruop* *onjor-dox-toro-j*
金を得る-CV 棺 作る-VN.NEUT-3PL-Q
「哀れな昔の人々は、どこからそれほど多くの金を持ってきて棺を作ったのだろう」

² 例えば *asaj*「愛する」の後置型連体修飾の用法について、辞書である Slepcev 他編 (2004: 256) の説明をサハ語からの拙訳により示せば次のようである：「所有接辞の付加した名詞と共に用いて言及される対象物を話者が格別に評価し、近しく思い、共感を持って特筆することを示す」。

³ 表愛修飾語は、名詞に後続して後置型連体修飾を行う他に次のような用法も持っている。*erejdeex*「哀れな」は *erej-deex* (苦しみ-PROP) と、*muŋnaax*「哀れな」は *muŋ-naax* (不幸-PROP) と分析することが可能である。これら2つの語および *baraxsan*「愛する」、*oburgu*「立派な」は、単独で現れそれ自体を名詞句として用いることも可能である。*suuwa*「愛する」は、やはり単独で用いることのできる名詞 *suuwa*「誤り、間違い」と同音である(両者は同音異義語である可能性もある)。*asaj*「愛する」には動詞述語に後続し程度を強める用法がある他、それ自体が述語として現れることも稀にあり、この時には身体部位を主語として「痛い」を表す(これら3つの用法は同音異義の関係にある別の語に属する可能性もある)。

- (13) *ehigi erejdeex-ter belex-xiti-ger naaduj-bap-puun*
 君たち 哀れな-PL 贈物-POSS.2PL-DAT 要する-NEG.PRES-1SG
 「哀れな君たちの贈物は、私は要らない」

3.3 所有接辞

表愛修飾語を含む名詞句に所有接辞が付加される場合、所有接辞は名詞にのみ付加され、表愛修飾語には付加されない。つまり複数接辞の場合とは異なり、所有接辞は一致をしない。

- (14) *telefon-um muɣmaax bajaattarɣnaa-n ul-la*
 電話-POSS.1SG 哀れな ゆらゆらする-CV AUX-PAST:3SG
 「[私は電話を切ると受話器を本体に向け投げつけた] 哀れな電話は、ぐらぐらした」

- (15) *obo-m suuɣha aččuk-taag-a buoluo*
 子-POSS.1SG 愛する 空腹-PROP-POSS.3SG だろう
 「愛する我が子は空腹だったのだろう」

- (16) *uolat-tar-um baraxsat-tar baru cett-ynen cejcebyl*
 青年-PL-POSS.1SG 愛する PL 全て 面-INST 支え
buol-al-laru-gar maxtal-um murjur-a suox
 なる-VN.PRES-3PL-DAT 感謝-POSS.1SG 終わり-POSS.3SG ない:COP.3SG
 「愛する青年たちが全面的に支えになってくれることに対し、私の感謝は尽きない」

3.4 格接辞

表愛修飾語を含む名詞句に格接辞が付加される場合、所有接辞の場合とは対照的に格接辞は表愛修飾語にのみ付加され、名詞には付加されない。つまり複数接辞の場合とは異なり、格接辞は一致をしない。

- (17) *dojdu-m baraxsan-ur kcer-dœx-py-ne kyys-per*
 国-POSS.1SG 愛する-ACC 見る-VN.NEUT-1SG-PART 力-POSS.1SG-DAT
kyys eb-ill-er
 力 加える-PASS-PRES:3SG
 「愛する我が祖国を見ると、私の力に力が加えられる(力がみなぎる)」

- (18) *bulčut muɣnaax-xa kuturug-u-n=ere xaallar-buut-tar*
 獵師 哀れな-DAT 尾-POSS.3SG-ACC=だけ 残す-PAST-3PL
 「[3匹の狼が飼い犬を食いちぎり] 哀れな獵師には犬の尾だけを残した」

- (19) *sulguhwut-tar baza-laru-gar UAZik baraxsan-uman*
 馬飼ひ-PL 基地-POSS.3PL-DAT UAZik 愛する-INST
ajannaa-n tijj-e-bit
 旅する-CV 着く-PRES-1PL
 「私たちは馬飼ひたちの拠点まで愛する UAZik で向かう⁴」

3.5 表愛修飾語を含む名詞句の構造

以上見てきたように、サハ語の後置型連体修飾においては、屈折接辞の付加についても典型的名詞句との相違点を示す。表愛修飾語を含む名詞句の構造を模式的に示せば(20)のようになる。

- (20) 名詞-PL-POSS 表愛修飾語-PL-CASE

後置型連体修飾は、語順および数の一致が見られる点において、典型的名詞句とは異なっている。一方で格接辞については、最も後方の要素にのみ付加されるという点で、典型的名詞句の場合と同様に振る舞っている。

4. 接語との違い

サハ語の接語は、専ら自立語に後続するタイプ、すなわちencliticである。主要部である名詞に後続する要素という点において、表愛修飾語の振る舞いは接語と共通するようにも思える。しかしながら結論から言えば、表愛修飾語の形態統語的振る舞いは接語の場合とも異なるものである。以下に、名詞に接語が後続するいくつかの例を示す。

- (21) *urut uolat-tar=ere yceren-el-ler ete*
 以前 男子-PL=だけ 学ぶ-PRES-3PL AUX
 「[大学では] 以前は男子だけが学んでいた」

⁴ UAZik とは、ロシアの大衆的ジープの名である。

- (22) bu sir-ge uhuu-r sanaa
 この 土地-DAT 長くなる-VN.PRES 考え
 xaja-butuu-gar =da suox
 どちら-POSS.1PL-DAT=も ない:COP.3SG
 「この地に長く留まるという考えは、私たちのどちらにもない」

- (23) iti-ni =*ba*bas bil-e-bin
 それ-ACC=くらい 知る-PRES-1SG
 「私はそれくらいは知っている」

以上の例が示すように、名詞に接語が後続する場合、屈折接辞は名詞にのみ付加される。接語は単にそれらに後続するのみであり、表愛修飾語とは違い、屈折接辞が付加されることも無ければ名詞との「数の一致」を示すことも無い⁵。

5. ツングース諸語との対照

サハ語の表愛修飾語による後置型連体修飾には、2つの特異性（語順の逆転および数の一致）が見られることを指摘した。同系のチュルク諸語において、連体修飾語が名詞に後続するという語順の逆転現象は報告されていない [Johanson (1998: 49), Göksel and Kerslake (2005: 162)]。Johanson (1998: 49) はさらに “There is no agreement in number or case between dependents and heads” と述べ、チュルク諸語では名詞句内に一致が見られないことを指摘している。モンゴル諸語においても、連体修飾語は被修飾名詞に先行し、その際には屈折接辞により形を変えないことが指摘されている [大江 (1988), Kullmann and Tserenpil (2008: 377)]。ところが、同じくアルタイ型言語の特徴を示すツングース諸語では、本稿で指摘したような後置型連体修飾に類似した現象が報告されている。

第1節でも述べたように、河野 (1989) は、アルタイ型言語の類型的特徴は連辞的統語原理であると指摘する。しかし河野 (1989) は同時に、ツングース語族に属するエウエンキー語では「名詞とそれを修飾する形容詞の間で照応が行われ、しかも、形容詞のあるものが名詞の後にくる」ことについても言及し、これを「アルタイ型の言語としては異例の現象」であると指摘している。エウエンキー語におけるこのような語順について、具体的には大江 (1988) が例を挙げている。(24)に示すように、エウエンキー語においては修飾語（この場合は「妻帯している」）が被修飾名詞「兄」に後続することがある。さらに、処格接辞および再帰所有接辞についても、修飾語と被修飾名詞の間で一致している。

⁵ ただし疑問詞に後続し不定代名詞を形成する接語 =eme は、*tug-u =eme-ni* 「何かを」(何-ACC=CLI-ACC) のように、先行の疑問詞と同一の格接辞を伴うことが稀にある。この現象は、適用可能な接語の数においても頻度においても極めて限られていることから、本稿の考察からは除外するものとする。

- (24) akiin-dulaa-vii asiičii-laa-vii [大江 (1988: 542)]
 兄-LOC-REFL 妻帯している-LOC-REFL
 「妻帯している自分の兄に」

このような語順の逆転および一致について包括的かつ詳細に扱った研究として、風間 (1994) がある。風間 (1994) は、ツングース諸語において修飾語と被修飾語の語順が逆転する現象、およびその際に修飾語と被修飾語の間で数および格の一致が起こる現象 (風間 (1994) はこれを「一致」と呼んでいる) について、ナーナイ語を中心に広くツングース諸語全般について記述を行っている。風間 (1994: 77-78) によれば、ツングース諸語のこの現象には2つのタイプがある。風間 (1994) の分類を筆者がまとめたものを表1に示す。

[表1] ツングース諸語における「一致」の2つのタイプ

	Aタイプ	Bタイプ
語順および一致の起こる条件	修飾語が名詞に先行または後続 修飾語が後続する際のみ一致	修飾語が常に名詞に先行 一致が義務的に起こる
修飾語の種類	主に数詞・数量の形容詞	修飾語一般
一致する屈折接辞	ほとんど対格接辞に限られる	複数接辞および格接辞
言語	ナーナイ語など、ほとんどのツングース諸語	エウエンキー語南方言, エウエン語東・中央方言

サハ語の後置型連体修飾は、サハ語一般の統語法のみならずチュルク諸語全体の統語法から見ても特異な語順である。しかも、やはりチュルク諸語にはふつつ観察されない「数の一致」が、修飾語と被修飾語の間に義務的に起こる。これに類似した現象が、サハ語の近隣で話されているツングース諸語に見られる事実は興味深いものであるから、以下でサハ語とツングース諸語の対照を試みる。

まず、表1に挙げた項目のそれぞれについてサハ語の場合と比べてみる。[1] 語順および一致の条件については、サハ語では表愛修飾語は必ず被修飾名詞に後続し、その際に数の一致が義務的に起こる。従ってツングース諸語のAタイプに近いと言えるが、ただしツングース諸語の場合とは異なり、表愛修飾語は被修飾名詞に先行することは無い。[2] 修飾語の種類については、サハ語では話者の親近感を表すものに限られるから、ツングース諸語のA・B両タイプのどちらとも異なっている。[3] 一致する屈折接辞については、サハ語では複数接辞のみであるから、ツングース諸語のA・B両タイプのどちらとも異なっている。

このように、連体修飾語と被修飾名詞の間に非典型的な語順が見られ、なおかつ両者の間に一致が起こるという点で、サハ語の後置型連体修飾とツングース諸語の「一致」は表面上では

類似する。しかしながらその内実を詳しく見ると、ツングース諸語とサハ語ではかなり異なる振る舞いを示していることが分かる。以上の事実から考えると、サハ語の後置型連体修飾は、ツングース諸語からの間接的影響があった蓋然性はあるにせよ、そこからの直接的な借用であるとは考えにくいものである⁶。

6. 結論

本稿では、サハ語の後置型連体修飾について報告した。サハ語には河野 (1989) の言う「連辞的統語原理」が広く見られ、修飾語は被修飾要素に先行することを特徴とする。この原則に反し、6つの表愛修飾語は被修飾名詞に後続しなければならず、さらにその際、被修飾名詞との間で数の一致を行う。この語順および一致は、サハ語の典型的な名詞句には見られない現象であるが、一方で格接辞については、典型的な名詞句と同様に、最も後方の要素にのみ付加される。サハ語の後置型連体修飾と表面的に類似する現象として、ツングース諸語に見られる「一致」と呼ばれる現象があるが、両言語における現象を詳しく検討した結果、実際の振る舞いにはかなりの違いがあることが明らかになった。

⁶ 現在、サハ語の話されている地域とその使用域が近接するのは、エウエンキー語およびエウエン語である。これらの言語は、実際には相互に混じり合うモザイク状の分布を示し、エウエンキー語またはエウエン語の話者がロシア語・サハ語との3言語使用者であることもしばしばである。風間 (1994: vii) の示す地図によれば、エウエン語諸方言のうち、サハ語使用域から離れている東方言・中央方言がBタイプであり、サハ語使用域に近い西方言のみがAタイプに属する。エウエンキー語諸方言については、サハ語使用域をちょうど三方から取り囲むように分布しており、サハ語使用域との近さとA・Bタイプの相関は一概に言えない。

略号

ABL	奪格	PASS	受身
ACC	対格	PAST	過去
AUX	助動詞	PL	複数
CLT	接語	POSS	所有
COP	コピュラ	PRES	現在
CV	副動詞	PROP	propriative
DAT	与格	SG	単数
INST	具格	VN	形動詞
NEG	否定	VN.NEUT	形動詞中立時制
PART	分格		

参考文献

Göksel, Asli and Kerslake, Celia (2005) *Turkish. A comprehensive grammar*. London/New York: Routledge.

Johanson, Lars (1998) The structure of Turkic. In: Lars Johanson and Éva Ágnes Csató (eds.) *The Turkic languages*, 30-66. London: Routledge.

風間伸次郎 (1994) 『ナーナイ語の「一致」について』 北海道大学文学部言語学研究室.

河野六郎 (1989) 「日本語の特質」 亀井孝・河野六郎・千野栄一 (編) 『言語学大辞典 第2巻』 1574-1588. 三省堂.

Kullmann, Rita and Tserenpil, Dandii-Yadamyn (2008) *Mongolian grammar*. [4th revised edition]. Ulaanbaatar: ADMON.

大江孝男 (1988) 「アルタイ諸言語」 亀井孝・河野六郎・千野栄一 (編) 『言語学大辞典 第1巻』 528-545. 三省堂.

Slepcev P.A. et al.(eds.) (2004) *Tolkovjy slovar' jakutskogo jazyka. I.* Novosibirsk: Nauka.

Postmodification and number agreement between nouns and postmodifiers in Sakha (Yakut)

Fuyuki Ebata

fuyuki@mtc.biglobe.ne.jp

Keywords: Sakha, noun phrase, modifier, word order, agreement

Abstract

Sakha is one of the Altaic-type languages, which are characterized by the strong syntactic principle that the modifier always precedes the head. In Sakha, however, there are several postmodifiers that must follow the head noun against the above-mentioned principle. This paper reveals the following two points on Sakha postmodifiers. [1] All the postmodifiers in common convey a sense of intimacy to the modified noun. [2] What is most unusual is that postmodifiers must agree in number with the head noun, while the case suffix is attached only to the phrase-final element as in the typical noun phrases of Sakha.

(えばた・ふゆき アジア・アフリカ言語文化研究所)